

# 令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【三橋小】

## 学力向上 アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	ICTを道具として活用しながら、自らの学び方を考え、課題を解決しようとする力(自立した学習者)
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	<ul style="list-style-type: none"> <li>上記の力を向上させるためのアクションプランを、教員同士で話し合い、決定していく場を設け、その成果をまとめていく。(学期に2回以上)</li> <li>教員一人ひとりがアクションプランを実践する公開授業を行う。(一人年2回以上)</li> </ul>

⑤	年度末評価結果分析(2月)	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	<ul style="list-style-type: none"> <li>②詳細分析(学年・教科担当)</li> <li>③分析共有(児童生徒の実態把握)</li> <li>職員会議・校内研修等</li> </ul>
		↓
今年度の成果と 次年度の課題	さいたま市学習状況調査(学力) <小3-中3>(1月)	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果	調査の振り返り(4月)	学力向上策の実施
	↓	<ul style="list-style-type: none"> <li>①学校全体での取組</li> <li>②単元テスト・定期テスト等の分析・活用</li> <li>③調査問題を活用した授業</li> </ul>
結果から考えられる 児童生徒の実態	調査結果分析(7~8月)	

④	さいたま市学習状況調査結果の分析	
特徴的な結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>①学校全体での取組</li> <li>②単元テスト・定期テスト等の分析・活用</li> <li>③中間評価を経ての取組</li> <li>④調査結果を活用した授業</li> </ul>	
結果から考えられる 児童生徒の実態		

③	中間評価	
学力向上策の 実施状況	評価(※)	
	↓	
学力向上策の 見直し	中間評価(9月)	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【三橋小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	本年度、「スタディサプリ」や「ドリルパーク」などのデジタルドリルを、テスト前や学習進度に差が生じる場面で効果的に活用したことで、漢字や計算の基礎については概ね良好な定着がみられた。次年度も、一人ひとりの課題に合わせた個別最適な学習に継続して取り組ませていく。 一方で、言語事項(主述の関係、敬語等)や算数の単位・小数の構成、理科の実験器具の正しい扱い方といった基礎的知識の定着には依然として課題がみられる。次年度は、これらを日常的な指導や振り返りの中で繰り返し指導し、確実な定着を図る。また、教職員間でのICT活用の経験差を解消するため、「さいたま市情報活用チェックシート」に基づいた適切な指導法の共有を学校全体で推進し、どの学年においても質の高いICT活用授業を実践できるようにする。	
思考・判断・表現	本年度、学校課題研究で取り組んだ「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」により、児童が学習を自分事として捉え、思考する場面で効果的に設定することができた。次年度は、さらに一歩進めて、自分の考えを根拠とともに書き記す経験を積ませるため、単元内で「思考・表現する時間」を計画的に確保(3時間程度)読書活動の充実を図る。これにより、長い文章や資料を読み解くことへの抵抗感をなくし、算数の複雑な立式や理科の実験構想など、複数の情報を整理して解決する力の育成につなげていく。教職員が、魅力ある導入や必要感のある課題設定を共有し、児童が自力解決の見通しを持って取り組める授業改善を継続する。	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「書くこと」 算数「図形」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた指導を充実させていく必要がある。学習内容も多く、反復や振り返りの時間が十分に設定することが難しいことが課題である。	⇒ ICT等を活用した個別最適な課題に取り組む【単元内3時間程度】。 校内研究において、ICTを活用した指導法の共有を図る【月1回程度】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」「書くこと」 算数「図形」「データの活用」 <指導上の課題> 学校課題研究では、学習の個性化に取り組む。探求的な学びのサイクルを取り入れ、児童が進んで思考する場面を増やしていく必要がある。	⇒ 授業内で、思考・表現する時間を設ける【単元内3時間程度】。 学校課題研究に計画的に取り組む【月3回程度】。

全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)  
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	ICTを活用した個別最適な課題については、テスト前や授業後半など、学習進度に差が生じる場面で、効果的に活用することができた。その成果として、さいたま市学習状況調査では、漢字や計算等で概ね良好な定着が見られた。 校内研究のICTを活用した授業法の共有については、「さいたま市情報活用チェックシート」をもとに、児童生徒に必要な情報活用スキルを確認しながら、適切な指導法や授業法について共有することができた。 一方で、ICT活用には、学年間の差や、教員の経験による差がある。次年度はその差を少なくし、学校全体でICT活用を推進していきたい。
思考・判断・表現	B	学校課題研究で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に取り組み、一人ひとりの課題に合わせた協働学習に取り組んできた。その中で、児童が思考する場面で効果的に設定し、学習を自分事として取り組むことができるようにしてきた。 読書経験が豊富な5年生が、さいたま市学習状況調査で良好な結果だったことから、次年度は読書を通して、長い文に親しんだり、資料をみたりすることに抵抗なくとりくむことができるようにしたい。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、漢字を答える問題で正答率が全国より低く、また、無回答率も高い傾向があった。普段から漢字を書くように意識づけたり、タブレットのドリル学習に取り組んだりしながら、基礎・基本の力を身に付けることができるようにしていきたい。算数では、短答式の問題に課題が見られた。日々の授業で、選択式の問題だけでなく、短答式の問題にも取り組むことができるようにしていきたい。理科では、全国より正答率が高かった。授業内で取り組んだデジタルドリルが効果的だったと考えられる。今後も児童が興味をもつような授業展開を行っていく。しかし、無回答率はやや高い傾向が見られた。特に選択式の問題においては、無回答ではなく、自分の考えを記すことができるようにしていきたい。	
思考・判断・表現	国語と理科では、記述式の問題で正答率が低い傾向があり、無回答率も高かった。普段の授業から、自分の考えを書き記す経験をさせていきたい。算数では、複数の領域にまたがっているような問題において正答率が低い傾向があった。1つの単元内で思考・判断・表現するだけでなく、生活場面に即した問題や、他教科に関連しているような問題など、総合的な思考力を問う経験をさせていきたい。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	全学年を通して、国語の漢字の習得や算数の基礎的な計算技能については、概ね良好な定着がみられた。特に漢字については、前学年記号漢字を文の中で正しく使う力が身に付いており、日頃の意識付けやデジタルドリル活用の成果が表れていた。 理科の生命領域や金属の性質、社会の歴史的背景などの知識面も市平均を上回るなど得意としている。 一方で、言語事項(主語・述語の関係、敬語、修飾・被修飾の関係)、単位や小数の構成、社会の地図記号、理科の実験器具の正しい扱い方といった、基礎的な知識の確実な定着が今後の課題と言える。	
思考・判断・表現	国語の「読むこと」においては、文章や図表から必要な情報を探し、結び付けて理解する力が優れている。特に第5学年では全教科で市平均を上回るなど、学習習慣の安定が思考力の底上げに寄与している。 課題としては、記述式問題における無回答率の高さや、複数の情報を整理して自分の考えをまとめる力が挙げられる。算数では、問題文が長くなったり、複数の数量関係を捉えて立式したりする応用問題で正答率が低下する傾向がある。理科においても、実験結果から結論を導く力が育っているものの、条件を制御して実験を構想する場面に弱さが見られた。今後は、実生活の場面で結び付けた問題や、自分の考えを根拠とともに表現する機会をさらに充実させていく必要がある。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	「スタディサプリ」や「ドリルパーク」などのデジタルドリルを活用し、一人ひとりに合った個別最適な課題に取り組むことができた。 校内研修で情報活用能力チェックリストをもとに、児童に身に付けさせる情報活用能力を指導する方法について取り組んだ。	変更なし
思考・判断・表現	B	週1回学校課題研修の時間を設け、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について理解を深め、研究授業などを通して指導法を学んできた。 今後、子ども主体の授業改善をすすめて、授業内で思考・表現する時間をより多く設けていきたい。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)